20　次の文章は、夏目漱石の小説『三四郎』の一部である。〔これまでのあらすじ〕とそれに続く〔本文〕を読んで、後の設問に答えよ。（＊は〔本文〕の後に注があることを示す。）　　　　　　　　　　〈三重大〉二〇二一年度出題

〔これまでのあらすじ〕

　小川三四郎は福岡の田舎町出身で、熊本の高等学校を卒業後、＊二十三歳で大学に入るため上京した。上京した当初は、都会の人の多さに戸惑いつつも、同郷の先輩で理学者の野々宮宗八や、野々宮の高校時代の先生で、三四郎とは上京する汽車の中で会うなど不思議な縁のある広田など、知り合いも増え、次第に東京の街にも慣れてきた。また、野々宮や広田を介して、野々宮の妹のよし子や、亡くなった兄が広田と懇意であったことから、広田や野々宮と親交のある里見とも知り合いとなる。そして、三四郎は英語が得意で都会的な美禰子のことが気になり、同時に、美禰子と野々宮とが親密な仲ではないかと疑い始めていた。ある日、転居したばかりの広田の家に、広田のほか三四郎、野々宮、よし子、美禰子の五人が集まり、みんなで団子坂上から坂下にかけて開かれている＊菊人形を見に出かけた。ところが、途中で美禰子が一人はぐれそうになったため、三四郎は後を追いかけ、出口の方へ歩いて行く彼女に付いて行った。

〔本文〕

　二人が表で並んだ時、美禰子はうつむいて右の手を額に当てた。周囲は人が〔ａ　ウズ〕を巻いている。三四郎は女の耳へ口を寄せた。

　「どうかしましたか」

　女は人込みの中をの方へ歩きだした。三四郎もむろんいっしょに歩きだした。＊半町ばかり来た時、女は人の中で留まった。

　「ここはどこでしょう」

　「こっちへくと谷中の＊の方へ出てしまいます。帰り道とはまるで反対です」

　「そう。心持ちが悪くって……」

　三四郎は往来のまん中で助けなき苦痛を感じた。立って考えていた。

　「どこか静かな所はないでしょうか」と女が聞いた。

　谷中とが谷で出会うと、いちばん低い所に小川が流れている。この小川を沿うて、町を左へ切れるとすぐ野に出る。川はまっすぐに北へっている。三四郎は東京へ来てから何べんもこの小川の向こう側を歩いて、何べんこっち側を歩いたかよく覚えている。美禰子の立っている所は、この小川が、ちょうど谷中の町を横切ってへ抜ける石橋のそばである。

　「もう一町ばかり歩けますか」と美禰子に聞いてみた。

　「歩きます」

　二人はすぐ石橋を渡って、左へ折れた。人の家の路地のような所を＊十間ほど行きして、門の手前から板橋をこちら側へ渡り返して、しばらく川の縁を上ると、もう人は通らない。広い野である。

　①三四郎はこの静かな秋のなかへ出たら、急にしゃべり出した。

　「どうです、ぐあいは。頭痛でもしますか。あんまり人がおおぜい、いたせいでしょう。あの人形を見ているのうちにはずいぶん下等なのがいたようだから――なにか失礼でもしましたか」

　女は黙っている。やがて川の流れから目を上げて、三四郎を見た。二重にはっきりと張りがあった。三四郎はその目つきでなかば安心した。

　「ありがとう。だいぶよくなりました」と言う。

　「休みましょうか」

　「ええ」

　「もう少し歩けますか」

　「ええ」

　「歩ければ、もう少しお歩きなさい。ここはきたない。あすこまで行くと、ちょうど休むにいい場所があるから」

　「ええ」

　＊一丁ばかり来た。また橋がある。＊一尺に足らない古板を造作なく渡した上を、三四郎は大またに歩いた。女もつづいて通った。待ち合わせた三四郎の目には、女の足が常のを踏むと同じように軽くみえた。この女はすなおな足をまっすぐに前へ運ぶ。わざと女らしく甘えた歩き方をしない。したがってむやみにこっちから手を貸すわけにはいかない。

　向こうに屋根がある。屋根の下が一面に赤い。近寄って見ると、を干したのであった。女はこの赤いものが、唐辛子であると見分けのつくところまで来て留まった。

　「美しいこと」と言いながら、草の上に腰をおろした。草は小川の縁にわずかな幅をはえているのみである。それすら夏の半ばのように青くはない。美禰子はな着物のよごれるのをまるで苦にしていない。

　「もう少し歩けませんか」と三四郎は立ちながら、促すように言ってみた。

　「ありがとう。これでたくさん」

　「やっぱり心持ちが悪いですか」

　「あんまり疲れたから」

　三四郎もとうとうきたない草の上にすわった。美禰子と三四郎の間は四尺ばかり離れている。二人の足の下には小さな川が流れている。秋になって水が落ちたから浅い。角の出た石の上に＊が一羽とまったくらいである。三四郎は水の中をながめていた。水が次第に濁ってくる。見ると川上で百姓が大根を洗っていた。美禰子の視線は遠くの向こうにある。向こうは広い畑で、畑の先が森で森の上が空になる。空の色がだんだんってくる。

　②ただ単調に澄んでいたもののうちに、色が幾通りもできてきた。透き通るのが消えるように次第に薄くなる。その上に白い雲が鈍く重なりかかる。重なったものが溶けて流れ出す。どこで地が尽きて、どこで雲が始まるかわからないほどにものうい上を、心持ち黄な色がふうと一面にかかっている。

　「空の色が濁りました」と美禰子が言った。

　三四郎は流れから目を放して、上を見た。こういう空の模様を見たのははじめてではない。けれども空が濁ったという言葉を聞いたのはこの時がはじめてである。気がついて見ると、濁ったと形容するよりほかに形容のしかたのない色であった。三四郎が何か答えようとするまえに、女はまた言った。

　「重いこと。のように見えます」

　美禰子は二重瞼を細くして高い所をながめていた。それから、その細くなったままの目を静かに三四郎の方に向けた。そうして、

　「のように見えるでしょう」と聞いた。三四郎は、

　「ええ、のように見えます」と答えるよりほかはなかった。女はそれで黙った。しばらくしてから、今度は三四郎が言った。

　「こういう空の下にいると、心が重くなるが気は軽くなる」

　「どういうわけですか」と美禰子が問い返した。

　三四郎には、どういうわけもなかった。返事はせずに、またこう言った。

　「安心して夢を見ているような空模様だ」

　「動くようで、なかなか動きませんね」と美禰子はまた遠くの雲をながめだした。

　菊人形で客を呼ぶ声が、おりおり二人のすわっている所まで聞こえる。

　〈中略〉

　ところへ知らん人が突然あらわれた。唐辛子の干してある家の陰から出て、いつのまにか川を向こうへ渡ったものとみえる。二人のすわっている方へだんだん近づいて来る。洋服を着てをはやして、年輩からいうと広田先生くらいな男である。この男が二人の前に来た時、顔をぐるりと向け直して、正面から三四郎と美禰子をにらめつけた。その目のうちには明らかに〔ｂ　ゾウオ〕の色がある。三四郎はじっとすわっていにくいほどな〔ｃ　ソクバク〕を感じた。男はやがて行き過ぎた。その後影を見送りながら、三四郎は、

　「広田先生や野々宮さんはさぞあとでぼくらを捜したでしょう」とはじめて気がついたように言った。美禰子はむしろやかである。

　「なに大丈夫よ。大きな迷子ですもの」

　「迷子だから捜したでしょう」と三四郎はやはり前説を主張した。すると美禰子は、なお冷やかな調子で、

　「責任をのがれたがる人だから、ちょうどいいでしょう」

　「だれが？　広田先生がですか」

　美禰子は答えなかった。

　「野々宮さんがですか」

　美禰子はやっぱり答えなかった。

　「もう気分はよくなりましたか。よくなったら、そろそろ帰りましょうか」

　美禰子は三四郎を見た。三四郎は上げかけた腰をまた草の上におろした。その時三四郎はこの女にはとてもかなわないような気がどこかでした。同時に③自分の腹を見抜かれたという自覚になう一種の屈辱をかすかに感じた。

　「迷子」

　女は三四郎を見たままでこのを繰り返した。三四郎は答えなかった。

　「迷子の英訳を知っていらしって」

　三四郎は知るとも、知らぬとも言いえぬほどに、このを予期していなかった。

　「教えてあげましょうか」

　「ええ」

　「――わかって？」

　三四郎はこういう場合になるとに困る男である。の機が過ぎて、頭が冷やかに働きだした時、過去をみて、ああ言えばよかった、こうすればよかったと後悔する。といって、この後悔を予期して、むりに応急の返事を、さもしぜんらしく得意に吐き散らすほどに〔ｄ　ケイハク〕ではなかった。だからただ黙っている。そうして黙っていることがいかにも＊であると自覚している。

　という言葉はわかったようでもある。またわからないようでもある。わかるわからないはこの言葉の意味よりも、むしろこの言葉を使った女の意味である。三四郎はいたずらに女の顔をながめて黙っていた。すると女は急にまじめになった。

　「私そんなに生意気に見えますか」

　その調子には弁解の心持ちがある。三四郎は意外の感に打たれた。今までは霧の中にいた。霧が晴れればいいと思っていた。この言葉で霧が晴れた。明瞭な女が出て来た。晴れたのが恨めしい気がする。

　三四郎は美禰子の態度をもとのような、――二人の頭の上に広がっている、澄むとも濁るとも片づかない空のような、――意味のあるものにしたかった。けれども、それは女のきげんを取るための挨拶ぐらいで戻せるようなものではないと思った。女は＊卒然として、

　「じゃ、もう帰りましょう」と言った。のある言い方ではなかった。ただ三四郎にとって自分は興味のないものとあきらめるように静かなであった。

　空はまた変ってきた。風が遠くから吹いてくる。広い畑の上には日が限って、見ていると、寒いほど寂しい。草からあがる＊でからだは冷えていた。気がつけば、こんな所に、よく今までべっとりすわっていられたものだと思う。自分一人なら、とうにどこかへ行ってしまったに違いない。美禰子も――美禰子はこんな所へすわる女かもしれない。

　「少し寒くなったようですから、とにかく立ちましょう。冷えると毒だ。しかし気分はもうすっかり直りましたか」

　「ええ、すっかり直りました」と明らかに答えたが、にわかに立ち上がった。立ち上がる時、小さな声で、ひとりごとのように、

　「」と長く引っ張って言った。三四郎はむろん答えなかった。

　美禰子は、さっき洋服を着た男の出て来た方角をさして、道があるなら、あの唐辛子のそばを通って行きたいという。二人は、その見当へ歩いて行った。のうしろにはたして細い三尺ほどの道があった。その道を半分ほど来た所で三四郎は聞いた。

　「よし子さんは、あなたの所へ来ることにきまったんですか」

　女はで笑った。そうして問い返した。

　「なぜお聞きになるの」

　三四郎が何か言おうとすると、足の前にがあった。四尺ばかりの所、土がへこんで水がぴたぴたにたまっている。そのまん中に足掛かりのためにてごろな石を置いた者がある。三四郎は石の助けをからずに、すぐに向こうへ飛んだ。そうして美禰子を振り返って見た。美禰子は右の足を泥濘のまん中にある石の上へ乗せた。石のすわりがあまりよくない。足へ力を入れて、肩をゆすって調子を取っている。三四郎はこちら側から手を出した。

　「おつかまりなさい」

　「いえ大丈夫」と女は笑っている。手を出しているあいだは、調子を取るだけで渡らない。三四郎は手を引っ込めた。すると美禰子は石の上にある右の足に、からだの重みを〔ｅ　タク〕して、左の足でひらりとこちら側へ渡った。あまりにをよごすまいと念を入れすぎたため、力が余って、腰が浮いた。のめりそうに胸が前へ出る。その勢で美禰子の両手が三四郎の両腕の上へ落ちた。

　「」と美禰子が口の内で言った。三四郎はそのを感ずることができた。

（夏目漱石『三四郎』より。出題に際し原文の一部を省略した。）

〔注〕　＊二十三歳で大学に入る＝明治後期の学校制度では、現在の高等学校に相当する旧制中学校を卒業後、大学進学の予備教育を受ける旧制高等学校（大学予科）を経て大学に進学するのが通例であった。

　　　　＊菊人形＝菊の花や葉を細工して人形の衣装とし、劇や物語の一場面を作って見せるもので、『三四郎』が書かれた明治後期頃までは、東京の団子坂で盛んに興行された。

　　　　＊半町＝距離の単位。一町は約一〇九メートルであり、その半分の長さ。

＊天王寺＝現在の東京都台東区にある天台宗の寺。

　　　　＊十間＝長さの単位。一間は約一・八二メートルであり、その十倍の長さ。

＊一丁＝「一町」に同じ。

　　　　＊一尺＝長さの単位。一尺は約三〇・三センチメートル。

＊鶺鴒＝水辺に住み、形の美しい小鳥。羽色は黒白、黄色などで、長い尾をよく上下させる。

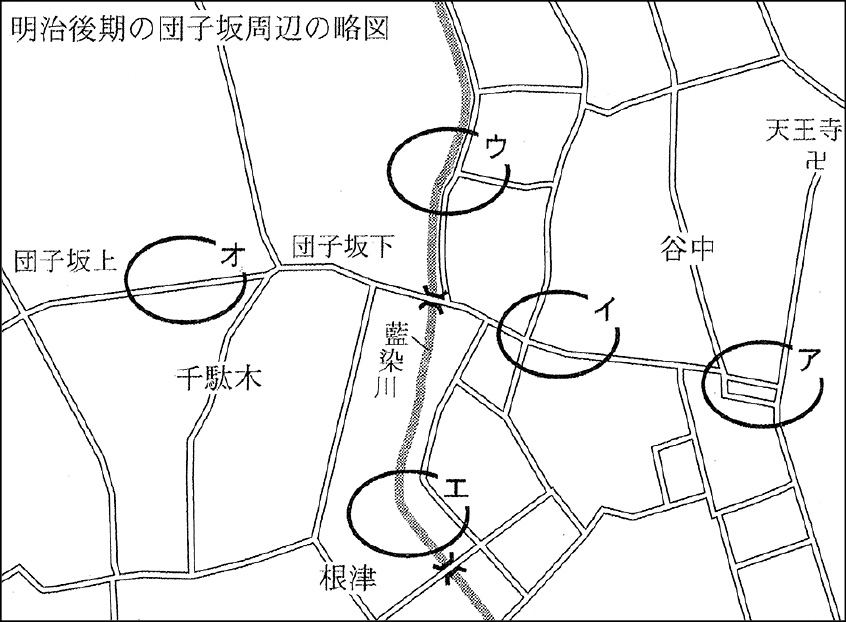
　　　　＊半間＝気がきかないこと。

＊卒然＝にわかに起こるさま。突然。

＊地息＝地面から蒸散する水蒸気。

問１　〔　ａ　〕～〔　ｅ　〕のカタカナを漢字に改め、で丁寧に書け。

問２　菊人形の会場から出た後、傍線部①の時点で三四郎と美禰子は左の略図中のどの辺りにいると考えられるか。ア～オの選択肢の中から一つ選んで、その記号を記せ。



問３　傍線部②の風景を隠喩であると仮定した場合、この空の描写は何をたとえていると考えられるか。三〇字以内で述べよ。

問４　傍線部③について、三四郎は美禰子に「自分の腹を見抜かれた」と感じているが、「自分の腹」が指す具体的内容を、三五字以内で述べよ。

◎問５　本文全体から浮かび上がる美禰子の人物像を、本文の描写を根拠として挙げながら七〇字以内で述べよ。

【解答と採点基準】

問１　ａ＝渦　　ｂ＝憎悪　　ｃ＝束縛　　ｄ＝軽薄　　ｅ＝託

問２　ウ

問３　Ａ美禰子の気持ちを測りかね Ｂ不安と憂鬱が増していく Ｃ三四郎の様子。（30字）

Ｃがなければ全体０。

Ａ＝４〔美禰子の気持ちを測りかねることを説明。〕

Ｂ＝４〔不安や物憂い気持ちが増していくことを説明。〕

Ｃ＝２〔三四郎の心情であることを説明。〕

問４　Ａ後を追いかけるぐらい美禰子が気になり、Ｂ野々宮との関係を疑っていること。（35字）

Ａ＝５〔美禰子が気になっていることを説明。〕

Ｂ＝５〔野々宮との仲を疑っていることを説明。〕

問５　Ａ迷子になっても平然とし、Ｂ三四郎の言葉も聞かず逆に翻弄し、Ｃ広田や野々宮にも冷やかで、Ｄわざと女らしく甘えた歩き方をしない Ｅ自立した知的な女性。（68字）

Ｅがなければ全体０。

Ａ＝２〔迷子になっても冷静であることを説明。〕

Ｂ＝２〔三四郎の言うことを聞かず、逆に謎めいた言葉をかけることを説明。〕

Ｃ＝２〔広田や野々宮に対するそっけなさすぎる評価を説明。〕

Ｄ＝２〔女らしく甘えた歩き方をしないことを説明。〕

Ｅ＝２〔知的で自立していることを説明。〕